

2018年6月17日

福音書からのメッセージ

夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。

(マルコによる福音書 4章 27節)

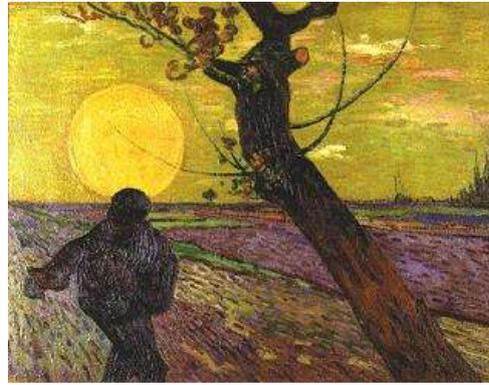
今日の箇所には二つのたとえが出てきます。一つは種の成長に関するもの、そしてもう一つはからし種に関するものです。農業の経験がある方はお分かりかと思いますが、農作物をきちんと育てるためには、それなりの作業が必要です。水をあげたり、雑草を抜いたり、実が出来そうな時期になったら鳥や動物から守ったり。でも同時に、まったく分からないような力が働いて、その種を成長させていることも良く知っています。いつの間にか知らないうちに成長する、神の国とはそのようなものだとイエス様は言われます。

またとても小さなからし種が、どんな野菜よりも大きくなることも神の国にたとえられます。小指に乗るくらいのわずかなものが、人が見上げるほどのものになる。神の国とはそういうものなのです。

神の国とは、神さまの支配のことです。神さまによる愛の支配です。知らない間に神さまの愛が満たされ、驚くほどたくさんの神さまの愛が注がれるのです。

農夫は種を蒔いて、ただ寝て起きるだけでした。何もしていません。でも彼は、種が必ず成長することを知っていました。どんな野菜よりも大きくなることを信じていました。だから種を蒔いたのです。握りしめていた種を手放し、地に委ねたのです。小さな種でも大きく育つことを信じ、種を蒔いたのです。

イエス様の周りには、自らを正しい者だと自負し、清くあり続けようとした人たちがいました。言い方を変えれば、自分の手で種を成長させることができると思い、種



を大事に握りしめていた人たちでした。わたしたちにも、そのような一面はないでしょうか。わたしたちは

ただ一方的に与えられた大きな恵みによって、生かされています。でもそのことを忘れ、自分の力で生きようしてはいないでしょうか。種を握りしめてはいないでしょうか。イエス様は、手を離せと命じられます。手に持っているその種を、ばらまいてしまえと言われているのです。種を神さまに委ねて初めて、種は成長するのです。

またイエス様の周りには、群衆もいました。彼らはイエス様を頼ってきました。彼らは自分の小ささを自覚し、自分の罪深さに気づいていました。神さまを頼らないと歩いていけない。でもその神さまに、顔を向けることすらできないのです。そのような思いを持つ人に、イエス様は語られます。ちっぽけなからし種のようなあなたがたも、驚くほど大きく育てられる。それが神の国なのだ。

わたしたちが自分の小ささを感じたとき、このイエス様の言葉が響いて来ます。安心しなさい。大丈夫、神さまに委ねなさいという言葉が。

神さまを信頼して、歩いていきましょう。神さまはわたしたちと共におられます。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>